



筑紫女学園大学リポジット

A Study of Prewar Buddhist Childcare: An Annotated Bibliography

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金見, 倫吾, KANEMI, Ringo メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/934

仏教保育資料解題―著述編―

金 見 倫 吾

仏教保育事業に關係する資料を分類するにあたり、その経営手法を教授するものを実践編とし、仏教の立場に基づく理念や寺院特有の事情について述べたものを著述編とする。本稿は後者に分類される資料を当時の全体状況や社会事業の展開、仏教教団の思想・行動のなかで位置づけ、その資料的意義を明らかにすることをめざすものである。

浄土真宗本願寺派社会部の創設

大正三（一九一四）年に勃発した第一次世界大戦にともなうヨーロッパ諸国への輸出入途絶により染料や薬品などの化学工業や鉄鋼・造船・機械・紡績などの国内諸産業は異常ともいえる活況を呈した¹。このいわゆる「大戦景気」によって労働者の賃金は上昇したものの、同時に生じた物価の高騰と米価の急上昇によって困窮した庶民は大正七（一九一八）年七月に富山県の漁村の主婦たちが始めた運動を皮切りに全国的規模²で米騒動を起こした³。翌大正八年に大戦が終結すると日本の輸出は後退し、大正九（一九二〇）年に株式市場が暴落、紡績・製糸業の操業短縮などによる不況となる（戦後恐慌）。さらに大

正十二（一九二三）年九月の関東大震災は経済に大きな打撃をもたらした。昭和二（一九二七）年には震災手形の処理の過程で金融恐慌が発生した。多数の小規模銀行の破産により恐慌は収束するも、昭和四（一九二九）年アメリカ・ニューヨークの株式市場大暴落の影響によってふたたび恐慌状態となり（昭和恐慌）、企業の操業短縮・休業・倒産・合理化は労働者の賃金引下げ・人員整理へとつながって失業者は昭和六（一九三一）年には二〇〇万人に達した⁴。労働争議は大正十五（一九二六）年をピークにいったん減少していたものの、昭和四（一九二九）年から再び急増し、全国で一七万人、翌五年には一九万人超となった⁵。

都市部においては失業・貧困の拡大によって栄養不足で授業中に卒倒するほどの欠食児童が生まれ、非行・虐待・心中などが多発した。昭和十二（二三三七）年に東京市社会局が実施した「東京市内に於ける棄児調査」では昭和二（一九二七）年から昭和一〇（一九三五）年までの八年間に新聞紙上で報道された親子心中の記事分析がされており、それによると心中に関する記事の総件数は一七三五件で、うち母子心中はその七〇%を占めるとい⁶。こうした悲惨な状況は農村部

においてはさらに深刻さを増した。小作争議件数は大正十五（一九二六）の二七五一件を第一のピークに減少傾向を辿った後、世界恐慌と東北の凶作とを背景として再び増加し、昭和六（一九三一）年に第二次高揚期（三四一九件）を迎えた⁷。小作農家所得の推移は大正十三年（一九二四）年を一〇〇とした場合、昭和五（一九三〇）～三二年の三か年の指数はそれぞれ五九・六、四六・二、五五・四となっている⁸。

農村の経済的困窮は乳幼児の死亡率の高さとなって現れ、明治以後の日本内地において最も乳児死亡率が上昇したのは大正五～九年の時期（出産一〇〇につき一七四。明治一九～大正四年は一六～一五八で推移）だった。米騒動とはまさに破局的危機におかれた庶民によってやむにやまねず起こされた抵抗運動だったのである。とくにこの時期、農村において乳幼児の死亡率が高まった原因として問題視されたのは、栄養・衛生状態の悪化もさることながら、都市部への労働者流出によって農村婦人に過剰な負担がかかり、育児へ手が届かなくなったことによる幼児死亡事故の多発であった。資料1にはそうした状況に対する危機意識が如実に反映されている。

（資料1）田村克己『宗団を中心とする農繁期保育事業の理論と実際』本派本願寺社会部、昭和五（一九三〇）年十二月

資料1著者の田村克己は大阪弘済会保育部長であり、資料1を執筆した翌年には大谷派宗務所社会課より『農繁期保育事業のすゝめ』（昭

和六年七月、『戦前期仏教社会事業資料集成』第八巻収録）を出版するなど、東西本願寺教団と関係が深いことがわかる。当時の大谷派は教団を挙げて農繁期開設を奨励しており、大谷派宣伝課発刊の『真宗』誌上でもたびたび啓発文を掲載している⁹。

田村が所属していた大阪弘済会は明治四二（一九〇九）年の大阪市大火に際し集まった義捐金処置残金三五万円を永久かつ有効に使用する目的で、当時の府知事高崎親章・市長植村俊平・大阪朝日新聞社社長村山龍平・大阪毎日新聞社社長本山彦一の四名が代表発起人となり明治四四（一九一一）年八月に設立された団体で、さらに大阪市から同額の支出をうけ大正元（一九一二）年八月、財団法人となった。大阪市生野区南生野町の生野事業所を中心として授産場・育児園・小学校・大阪慈恵病院・養老所・保養所など広範囲な事業を展開するも、アジア太平洋戦争の勃発により経営難となり、昭和十九（一九四四）年、全事業が大阪市により引き継がれた。大阪弘済会は¹⁰岩田民次郎（一八六九～一九五四）が天王寺区勝山通二丁目の空き寺・東立寺（のち、逢坂上之町に移転）に明治三五（一九〇二）年設立した大阪養老院と共に大正十四（一九二五）年、第一回全国養老事業大会を開催している¹¹。大阪養老院は大阪で初、全国でも4番目という高齢者福祉の先駆的取り組みであり¹²、弘済会は当時の社会福祉事業を牽引する重要な役割を担った団体だといえよう。

広汎な国民各層が参加した米騒動が与えた衝撃とともに大正デモクラシーと呼ばれる民主的風潮によって労働運動が再燃し、民主的社會改造論が世論として盛り上がりをもせたことは、社会局の創設を促す

契機となった。大正六（一九一七）年八月、地方局中に新設された救護課は大正八（一九一九）年十二月二四日、社会課に改組され、内務省官制上はじめて「社会」の文字があらわれた。この改組にともない、賑恤・救済・軍事救護および道府県下の救貧院・育兒院・感化院などの救護施設の管掌に、新たに失業対策・児童保護・社会事業などが加わり、また大正十一（一九二二）年には労働行政をも包括する機構となり、従来の恤救行政では対応しきれなかった新たな社会問題に対応していく行政体制が樹立されたのである¹³。

社会局新設にともなう床次内相は官民協力を推進する民力涵養運動を主唱した。大正八（一九一九）年三月、床次内相は内務省訓令第九四号で地方長官に

一、立国ノ大義ヲ闡明シ国体ノ精華ヲ發揚シテ健全ナル国家觀念

ヲ養成スルコト

一、立憲ノ思想ヲ明瞭ニシ自治ノ觀念ヲ陶冶シテ公共心ヲ涵養シ

犠牲ノ精神ヲ旺盛ナラシムルコト

一、世界ノ大勢ニ順応シテ銳意日新ノ修養ヲ積マシムルコト

一、相互諸和シテ彼此共済ノ実ヲ挙ケシメ以テ輕進妄作ノ憾ミナ

カラシムルコト

一、勤儉力行ノ美風ヲ作興シ生産ノ資金ヲ増殖シテ生活ノ安定ヲ

期セシムルコト

の五大要綱を盛り込み通達した。この訓令に基づき同年五月に各地方庁から担当理事官を招集して協議会を開催したのち内相は神道・仏教・キリスト三教の各派代表者を官邸に招いて宗教界の援助を求めて

いる¹⁴。こうした働きかけをうけてか、大正一〇（一九二二）年以降、仏教各宗派において社会事業を専門に担当する社会課設置の動きが加速し、大正一〇年一月に真宗大谷派、同年五月に浄土宗宗務所、翌十一年四月に浄土真宗本願寺、大正十四（一九二五）年七月に浄土宗総本山知恩院総務局が社会課を創設し、教団社会事業を組織化して社会問題への対応態勢を整えた¹⁵。

本願寺派において社会部の歴史は、大正十一（一九二二）年四月一日付で教団内の「社会的施設の調査並びに派内社会事業の振興及び聯絡を図る」（第一条）ことを目的とした社会課規定が發布され、監獄布教および「其他ノ社会事業」に取り組む組織として社会課が発足したことはじまる。その後、社会課は昭和二（一九二七）四月二一日付で社会部へと編成替えされた¹⁶。資料1発刊当時の本願寺社会部長山崎精華は、初代部長藤音得忍の龍谷大学教授転任をうけて補任された人物である。山崎は明治二八（一八九六）年、島根県に生まれ、大正十二（一九二三）年、東京帝大文学部印度哲学科を卒業。『大正新修大藏経』編纂に関わり、東洋大学や千代田女子専門学校にて教員を勤め、昭和四（一九二九）年に本派社会部長、翌年には本派本願寺保姆養成所長も兼務している¹⁷。昭和八（一九三三）年九月に後任の梅山英夫に役職を引き継ぐまでの四年間、山崎は社会部から『本派本願寺社会部要覧』第五輯（昭和六年五月）、同第六輯（昭和八年四月）、『教団と社会事業』¹⁸（昭和八年四月）の発刊を行うなど実直な業績記録を残した¹⁹。

資料1は冒頭、幼児の暖炉裏への転落、熱湯による火傷、蚊の襲撃

による死亡などの事故事例²⁰といった「農村の悲劇」や、新潟県における栄養不良、発育不良、母親の知識・方法の不備から生じる佝僂病の多発など当時の児童が置かれた状況²¹に触れ、また都市部での弘済会保育部が直面した「例年の記録を破つて反対に終了時の収入が入所時の夫れより減少を見たといふ奇現象」が慢性的世界的不況の深刻さの反映であると分析する²²。こうした状況下において農繁期に寺院を保育園として開放したならば「寺院に対する反感」は無くなり、あるいは「感謝へと早変わり」するであろうとしている²³。こうした発言の背景には、のちに触れる反宗教運動の影響が看取されるわけだが、同時に大阪の地で保育現場に携わっている著者特有の肌身感覚からくる危機意識もそこには表れている。

…寺院が保育園の開設を志すに当って、農村の階級闘争を緩和するとか、或は之に類似的の顧慮から出発したのであつては極めて危いものである。純真な子供の保育に当っては、不純な巧利的意思の介入は毫末も許さる可きでない。若し然らずとすれば、この人間の汚れた俗念によつて弄ばれる子供こそ実に気の毒だと言わざるを得ない。²⁴ (傍点引用者)

とする箇所には反宗教運動を含めた当時の社会運動に対する批判的な視点も顔を覗かせている。

「第一編 保育の経営 第一章 使命と効果」ではまず農繁期託児事業のもつ「使命」として以下の三つが挙げられる。

①児童保護の機関：(1)乳幼児の健全な発育を期し、その良性情涵養のための期節的児童保護の機関であ

ると共に、

(2)此の開設期間の習慣性を利用し、平常時に於て教化的、衛生的に善処せしめようとする使命をもつてゐる。

②経済保護の機関：(1)子供を預託する事によつて、母親その他の足手纏いを除き、

(2)家人をして心おきなく労働に従事せしめようとする経済保護の使命をもつてゐる。

③隣保改善の機関：(1)この保育の機会を捉へ来つて、母性に対し育児及保育の知識を授けると共に、子供を遇する眼の開発を促がし、

(2)子供の愛を透して家庭を文化的に向上せしめようとする使命をもつてゐる。²⁵

「子供を預託する事によつて、母親その他の足手纏いを除き、」「家人をして心おきなく労働に従事せしめようとする」使命が果たされた結果、「約三倍の作業能率の増進」がみられたとの報告を紹介する箇所²⁶には、寺院の社会的有用性顕示のため子どもを「足手纏い」といつて憚らない子ども観が示されている²⁷。こうした使命のほか、特に寺院で保育事業を行うことの効果として「尊いものに対して、ひざまづく心」²⁸の培養、つまり宗教教育としての機能が期待される。保育指導者によつて莊重な礼拝が行われれば、それは「幼児への最も効果ある宗教々育であり、身業説法であ」って、「信仰者が遊技を指導したら之

が宗教々教だ」と述べられ、その実際の手法は「第二編 保育の実際 第三章 保育の実際」の「B 朝の挨拶」の箇所です。詳細に説明される。

仏前に向いて着席し、園長が主任保母は前方に坐して礼拝し、それを子供に模倣させる。他の先生は幼児の側方から後方で礼拝する。尊いものにはひざまづく心の態度を培うのは此の一瞬時である。

この床しい態度を培うためには習慣として周囲から刺激を与えるので、ただ単に動作のみでなしに心の習慣から養って置かねばならぬ。先生である成人のこうした生活が園児の心にも尊いものだと感情をいだかせるような環境においてやりたい。心の態度として養成するには先生が仏前に於ける此の礼拝の態度がいかに効果を生む身業説法なるかを思つて。―それから保母と園児との団体的挨拶は立つて交換される。²⁹⁾

このように、弘済会保育部での実践に基づく詳細で具体的な保育手法が示されているのがこの資料の特徴といえよう。たとえば「一ツ 人前で我子を貶す無法者」「二ツ 拭き掃除より子供のしつけ」「三ツ みんなの子供に平等の愛念」「四ツ 選り出せ堀り出せ子供の美点」「五ツ 一つの方便、百の悔い」「六ツ 無理と知つたら負けない覚悟」「七ツ 殴るなら我身を殴る心持」「八ツ ッやめよ」よりッしませうの態度」「九ツ 子供の病、親の罪」「十の小言より笑顔の一言」という「母親十則」³⁰⁾をはじめ「保母十則」³¹⁾、「幼児十則」³²⁾、「食事十則」³³⁾、「間食十則」³⁴⁾、「睡眠十則」³⁵⁾、「往來十則」³⁶⁾などを自ら作成するのみならず、保育内容の予定案のなかで模倣唱呼・反復させるなど具体的な徹底方法を例示している。³⁷⁾ あるいは「週間標語」として「重

宝、道草防止、咀嚼、清潔、嗽含、よい言葉、腹巻、爪切、落書消去」などといった生活態度の指示もある³⁸⁾が、それら標語徳目を単に「注入してはならない（中略）軽い要求より以上に有ってはいけない³⁹⁾」といった指示もみられる。それは、幼児の質問に対し、あまり答え過ぎると「考へない子供」を育てるのでよくないとする⁴⁰⁾など、幼児の意思を尊重し自律した人格を育てようという意識にもつながっているといえよう。また、「六歳の子の飲酒」「間食代を要求する子」「他人の玩具持ち帰る子」など個別具体的な事例にどのように対応すべきかといった指示⁴¹⁾がなされるが、そのなかで体罰は「反抗心を持つやうになり、自然、心持もひねくれるやうにな⁴²⁾」るといった理由で原則的に否定されている。

資料1には貝柄町保育所での訓話の予定・実施の記録が掲載されている⁴³⁾。これによつてわれわれは当時の本願寺派における保育事業への参考事例として紹介された弘済会保育部の保育理念の内容を知ることができる。訓話の内容は雨期の食中毒⁴⁴⁾や鉛毒おしろい⁴⁵⁾、車の後乗りによる怪我⁴⁶⁾への注意喚起など、季節的な事柄、健康や安全に関する内容が多い。それとともに目を引くのは、「日本人みな尊ぶ 天子様」に就て話し、序に日本の国体に就ても幼児に解る程度に話し、皇室尊崇の念を少しでも深めたいと思う⁴⁷⁾や、「天皇陛下の御恩（中略）親指を父母に、小指を自分に、食指を神仏に、中指を皇室に、薬指を先生友人等に擬して話し⁴⁸⁾」など、天皇制への帰順を促す内容である。

田村には資料1の他に以下の著作があることが確認されている。

○『農繁期託児所の経営』富民協会、一六九―二二頁、昭和三（一九一四）年以前刊行⁴⁹

○『農繁期託児所経営の手引き』（１）（２）昭和三（一九一四）年一〇―十一月⁵⁰

○『農繁期保育事業のすゝめ』（大谷派、昭和六（一九一八）年）⁵¹

○『農村寺院の社会的進出』昭和六（一九一八）年六月⁵²

これらはそれぞれ資料１と重複する内容も含んでおり、資料１が最も内容が豊富であったため検討の対象とした。

反宗教運動と仏教保育

（資料２）堀緑羊『理想の仏教保育』代々木書院、昭和六（一九三二）年十一月

著者の堀緑羊（本名…信元 一九〇三―一九四九）は富山生まれの曹洞宗僧侶・布教師で、大正十三（一九二四）年に日本大学宗教科を卒業ののち仏教保育協会の創設（昭和三（一九二八）年）に尽力し、『仏教保育幼稚園経営法』、『仏教保育事業経営の常識』、『仏教童話』『ほたるぐさ』など幼児保育に関する多数の著作を発表。仏教の立場から保育事業の現場における方法論や経営法の紹介を積極的に行っている⁵³。また、金沢市野田寺町融山院では金沢学園幼稚園部・託児部・日曜学園・仏子文庫といった仏教保育・教育活動を展開した⁵⁴。堀信元

名義での著作として『解脱』（無我之声社、一九二四年）、『詩聖大智禪師…祇陀開山（祇陀開山詩聖大智禪師…昭和六年秋季普度會記念）』（祇陀寺、一九三二年、非売品）が確認できる。

資料２の文中では当時勃興期を迎え大きな反響を呼んでいた反宗教運動が多分に意識されている。そこでまず反宗教運動について概観しておきたい⁵⁵。昭和三（一九二八）年六月、明治神宮外苑日本青年館において神道・仏教・キリスト教代表らを一堂に会して御大典記念日本宗教大会が開催され、国体に反する共産主義・無政府主義を絶滅する、という国家意思に対する既成宗教教団の協調・貢献が確認された。また翌年九月から文部省指導のもと進められた教化総動員運動は、恐慌状況下における国民統合政策の一翼を宗教教団に実質的に担わせることとなった。こうしたなか、一九二〇年代後半から佐野学・浅野研真らによってマルクス主義の宗教批判理論が輸入され、宗教Ⅱ阿片論に基づいた反宗教運動が展開されていく。

昭和六（一九三二）年四月七日、川内唯彦・秋田雨雀・秋沢修二・佐野袈裟美・真溪蒼空朗・戸坂潤・岡邦雄・永田廣志・古在由重・三枝博音・服部之総らによって反宗教闘争同盟準備会（以下、準備会）が発足した。準備会は既成・新興宗教はおろか社会民主主義者の反動勢力とみなす排他性をもちながら、農村・工場における教化団体の撲滅を掲げ雑誌・論集の刊行、ピラマキ、講演会、ピクニック開催などの諸活動を積極的に行い、官憲による弾圧をうけつつ同年九月二一日、日本戦闘的無神論者同盟（以下、戦無）を結成。国家神道批判・天皇制打倒を明確に打ち出し、昭和九（一九三四）年五月に委員長川

内唯彦の検挙により組織が壊滅するまで活動した。また、浄土真宗本願寺派寺院出身で社会民主主義の立場から宗教改革の必要性を訴えた高津正道は、仏教界の腐敗を糾弾する『無産階級と宗教』（一九二九年）、『搾取に耽る人々』（一九三一年）を出版したが、社会民主主義者であることを理由に準備会から排除され、昭和六（一九三一）年十一月、境利彦らともうひとつの反宗教運動団体である日本反宗教同盟を結成している。その機関紙『反宗教』創刊号（一九三一年一〇月一日付）には「宗教は支配階級の特権維持の精神的用具である」「宗教は労働大衆の解放の進路を晦ます毒瓦斯である」「あらゆる形態の宗教打倒」「宗教的募財、寄附の徹底的拒絶」などのスローガンが掲げられている。高津の日本反宗教同盟は結成後どのような活動を展開したか明らかでなく、かなり早い時点で無活動状態となって自然消滅したといわれる⁵⁶。

ふたつの反宗教運動が立ち上げられた昭和六年には、宗教界においても関連雑誌で多数の特集が組まれるなどの強い関心が寄せられた。しかし、検挙や原稿押収といった弾圧や同年九月一日に勃発した柳条湖事件を発端とした「満州事変」による「民族的公憤」の高まり、またとくに戦無の場合、運動に共感を示す宗教者さえも反動勢力と見做す徹底抗戦の姿勢から組織の大衆化に失敗したことなどが原因で反宗教運動は孤立・停滞し、その活動は短命に終わっている。

資料2発刊は反宗教運動もそれへの関心も最高潮に達した時期であった。そのため文中にある

この頃搾取といふ言葉が、いやに反宗教運動の人達に依つて叫ば

れてゐますが、然しこうした意義ある事業の為に徒らに貪らざる布施をして貰ふ事は断じて搾取ではありません。布施と搾取とは全然その内容が異つてゐると思ひます。⁵⁷

といった記述には、僧侶である堀の反宗教運動への対抗意識が表れている。堀が仏教者としての立場を強く自覚していることは資料2の序文に記された執筆動機からもわかる。「仏教保育事業経営上の重要な諸問題を、ほどよく述べ来つた所謂指南書といふものが、あまり我が教界に少」ない状況のなかで、「幼稚園をやりたいのですが、何か直ぐ間に合ふ適切な参考書はありませんか」とか、「お寺を開放して周囲の人達のために、託児所を設けたいと思ひますが、何かよい方法はないものでせうか」などといふ真剣な質問」の数々に接した堀は、「さうだ！いま時代の趨勢にめざめてふんぜん立ち上つた我が仏教徒^{はらから}のために、その要求に応ずるのが、せめてもの自分の誓願」であると、仏教的使命感に基づく執筆動機を表明している。そして保育事業に携わる職員にも「外形的な資格ではなく、内面的の資格即ち仏教的信念を、何れも有する⁵⁸」ことを求めるのである。

：重要であらねばならぬのは、園長や保母その人の人格であり、その人格よりほのぐとにはひ出でたる目には見えざる雰囲気そのものであると信じます。若し仏教幼稚園託児所に、この敬虔なる宗教的雰囲気^{きんけん}の漂ふてゐないところがあるとしたら、如何に合理的な保育、組織的な管理をなすと雖もその保育は見事失敗でありませう。⁵⁹

との提言は現代における仏教保育においても傾聴に値するものといえ

る。しかし問題はその仏教理解の内容である。「第七章 幼児期に於ける宗教々育」で宗教教育の目的を「人間の総ての活動を純化すること即ち生命の総量を仏化すること」⁶⁰にあると主張する堀は、具体的な仏教教育の手法として

仏教の教育は飽迄精進し、努力し、よきものを造る即ち能動的なものでなくてはなりません。仏教の上から見れば、人間は生まれながらに穢きもの、醜きものを所有してゐることは決して恥ではない、それを教育に依つて如何に矯正し解脱して行くか、問題なのであります。そして一方に於いては本浄を引き出し、即ち一切衆生悉有仏性を開顕して、それに磨きをかけてゆくところに其処に人間としての価値を見出し得るのであります。⁶¹

と語り、また「第一章 幼児保育の意義及目的」では「ブルのためとかプロのためとかいふ捉はれの観念はなく、何れも平等の人間の子としてそこに、熱誠と慈愛の保育が行はれてこそ、真実光輝あるものと信じます。⁶²」と述べている。しかし、この「一切衆生悉有仏性」や「平等の人間の子」という人間観が、尊厳を蹂躪する社会的矛盾への批判的視座へとつながることはなく、堀が保育の根幹理念とする仏教の理解は先祖崇拜へと収斂していく。「祖先崇拜の観念は、日本人のもつ最もすぐれた美点であるが、この特有の精神を永久に保持すると共に、更によりよき子孫の繁栄を願ふ心即ち子孫崇拜の精神を養はねばならぬ……」⁶³といった信仰の立場からは、幼稚園の年中行事の例として仏教行事と並んで「神武天皇祭（建国祭）／天長節／魂まつり／神嘗祭（収穫感謝）／明治節／紀元節」が明記されることも当然である

といわねばならない。

堀が資料2を執筆したのは、仏教保育の適当な指南書が当時皆無であったからだった。執筆の動機を語るなかで堀は自らの著書『仏教幼稚園経営法』・『仏教保育事業経営の常識』を「何れも意に充たぬもの」であると述懐している。「関西でもつとも悲惨だと云はれた或る貧民窟で、見るも気の毒な子供たちの姿の接して以来⁶⁴」、仏教児童教化の経営法や童話・人形劇についての著作を多数発表した浄土宗の内山憲堂は資料2を

本書は幼稚園、保育所の歴史、保育理論、保育の実際に涉つて詳細に、よく纏めている、幼稚園、保育従業者の入門書として好適のものである。仏教保育理念の面におけるオリジナル性が欠けている等の点で不十分な点がないでもないが、仏教保育の本としては最初のもので、正に仏教保育界に輝かしい功績と言わねばならない。⁶⁵

と評価しており、国内外の教育学・心理学・哲学・宗教学など諸分野を渉猟して膨大な学説や保育手法を紹介する資料2の内容は堀の学識の広さを示している。

「満州事変」以降の情勢下における仏教保育理念

昭和六（一九三一）年九月十八日夜、関東軍は、奉天近郊の柳条湖で満鉄の線路を爆破し、これを中国側（張学良軍）の犯行として治安回復の名目で軍事行動をおこし、年末までに満州全域を占領した。関

東軍は満州の帰順勢力からなる「東北行政委員会」を組織し、それを土台に清朝最後の皇帝・溥儀を執政に据えて翌年三月一日、「満州国」建国を宣言させた。関東軍の柳条湖事件における疑惑の深まりと軍事行動の拡大、つづく建国宣言をうけて列国の対日姿勢が硬化するなか、中華民国政府は国際連盟に日本の行動を提訴。連盟から派遣されたリットン調査団が同年一〇月に発表した報告書は、中国の主権を認めつつ日本の権益にも配慮し、かつ連盟の体面も保つ「一石三鳥」の解決策を示したが、その受容は日本の威信と国益に反するという日本国内の世論もあつてききいれられなかった。昭和八（一九三三）年一月から三月にかけて、関東軍は満州国の国境を確定させるため熱河省で張学良軍と交戦（熱河事件）。これをうけて二月二四日に開かれた国際連盟特別総会では、満州の独立を否認し、中国の領土保全を確約した決議案が賛成四二、反対一（日本）、棄権一で可決され、全権松岡洋右は連盟脱退を述べ退場した⁶⁷。同年五月には塘沽停戦協定が締結され、満州では依然として抗日運動と関東軍との戦闘が続いていたが、日本国内では熱狂も醒め「非常時小康」といわれる風潮が広まった。そうしたなか軍部は八月に実施した関東防空大演習をはじめ空襲・灯火管制・毒ガス対策などの演習を行ない、「非常時」をおおる宣伝・施策を展開していた⁶⁸。

この時期、都市部では恐慌からの立ち直りの兆候もみられたが、農村部では無医村問題にともなう肺結核の死亡者多発や欠食児童、親子心中、児童虐待などの深刻な状況が続いた⁶⁹。農村不況の打開を図るため提唱されたのが農村経済更生運動である。一九三二（昭和七）年

五月、兵庫県農会が農家の自力更生意識を高めるため農人自力更生祭を開催したことを端緒とし、やがてそれは準戦時体制への対応として時局匡救事業に組み入れられることとなる。また児童保護の分野では愛国婦人会が同年九月から一か年間、給葉所・託児所の設置、産具の配給などの実施を決定した。これは、農繁期託児所が一九二一（大正一〇）年の四か所から一九二九（昭和）の一四〇〇か所に急増した時期に続くものといわれる⁷⁰。

こうした「非常時」といわれる状況下で宗教に求められたのは、福祉の担い手であるとともに思想善導の役目を果たすことであつた。「満州事変」が勃発して間もなく、神社においては国威宣揚・武運長久・戦勝祈願の祈願祭が急増し、在郷軍人・消防組・青年団・婦人会・小学校・自治組合・氏子などあらゆる団体の組織的動員が行われ、翌昭和七（一九三二）年春には戦没者慰霊祭が活況となって、そののち慰霊行事の恒久化をはかつて各地で招魂社の建設・改築や「軍神」神社の創建が相次いだ⁷¹。キリスト教や仏教の教団は近代日本の戦争政策に協力する姿勢を示してはいたが、神道祭祀への参加や神社参拝、大麻拝受を拒否する動きもみられた。しかし昭和八・九（一九三三・三四）年の奄美大島カトリック教排斥運動などの攻撃により、神社参拝を拒否していた宗教団体の多くも弾圧と孤立を恐れて転向していく⁷²。仏教保育を主題とした著述のなかでも、次の資料3は、当時求められた倫理観を基礎づけるものとして仏教を理解し、それに基づいた宗教教育の必要性の主張に重点を置いている点に特徴がある。

（資料3） 関寛之『訓育及保育の基礎たる宗教』大倉広文堂、昭和九（一九三四）年※第三章のみ収録

著者の関は明治二三（一八九〇）年長崎県生まれで、『仏教年鑑』には浄土真宗本願寺派とされ、東洋大学卒業後、児童心理および心理学を専攻する傍ら宗教教育研究に携わり、東洋大学・千代田女子専門学校で教鞭を執ったようである。関の著作は資料3のほか以下のものがある。

- 『児童学概論』洛陽堂、一九一八年
- 『玩具と教育』洛陽堂、一九一九年
- 『晩近の児童研究』洛陽堂、一九一九年
- 『児童学に基づける宗教教育及日曜学校』洛陽堂、一九二〇年
- 『児童之身体』洛陽堂、一九二〇年
- 『児童学要領』洛陽堂、一九二二年
- 『最近児童心理学概論』中文館書店、一九二三年
- 『児童学原理』アテネ書店、一九二四年
- 『日曜学校の理論と実際』光明閣、一九二四年
- 『学校児童心理学』改造社、一九二五年（改訂版…廣文堂一九三〇年）
- 『最新児童心理学』広文堂書店、一九二五年
- 『玩具と子供の教育』広文堂、一九二六年
- 『教育の基礎としての本能』同文館、一九二六年
- 『我子のおもちゃ』文化生活研究会、一九二六年

- 『心理学原論』厚生閣書店、一九二七年
- 『児童学原論―児童の身体及精神―』東洋図書、一九二七年（増訂版…同、一九三四年）

- 『運動心理学提要』大正書院、一九二七年
- 『高等教育心理学』東洋図書、一九二八年（改正版…同、一九三六年）

- 『児童の宗教心理及教育』二松堂書店、一九二九年
- 『児童宗教教育』東洋図書、一九二九年
- 『高等教育児童心理学』東洋図書、一九三〇年
- 『教授の實際に応用したる児童心理学』文化書房、一九三一年
- 『児童の宗教意識／幼年期の宗教々々／少年期並青年期の宗教々々育』（共著）大東出版社、一九三三年

- 『我子の教育』婦女界社、一九三七年
- 『日本宗教教育』東洋図書、一九三八年
- 『改正学籍簿精義』（共著）東洋図書、一九三八年
- 『玩具・絵本及読物』厚生閣、一九四〇年
- 『幼児心理学』東洋図書、一九四一年
- 『日本児童宗教の研究』彰考書院、一九四四年

資料3の内容は

- 第一編 児童の宗教心理 一―七四頁
- 第二編 児童の宗教教育 七五―一四八頁
- 第三編 仏教保育 一四九―二二一頁

となっており、本稿の関心から特に第三編を中心に考察したい。

関の保育観は教育的側面に重点がおかれていたことは、保育を「教育」といふ言葉を、その対象となる児童の年齢の如何によって限定したもので、学齢期以前の幼児又は幼児及び嬰兒の教育をいふ⁶⁶との定義づけていることからわかる。では、その保育が仏教に基づいたものとしていかに達成されると関は考えていたかという点、資料2の堀と同じく、形式的な手法だけではなく保育を施す者自身に仏教信仰が不可欠とする。

仏教保育の仏教といふ意味は、僧侶や仏教徒が行ふからととってはならない。何となれば、何人が行つても仏教精神を体していれば仏教保育といはれるからである。…保姆が仏教主義又は仏教精神を体しており、或は仏教の信仰を有して、その人格を以て保育するものとも考へられれば、仏教主義又は仏教精神に適ふやうに、或は仏教の信仰を何れはもつやうに、幼時から保育するものであるとも考へられる。⁶⁷

というように、寺院や寺族が関わり仏教的な儀式儀礼をとまねば仏教保育であるということにはならないと指摘されている。だがやはり問題となるのはここでいわれる仏教主義あるいは仏教精神とよばれるものの内容である。それについて関は

普通の教育に於て人格陶冶即ち訓育の中心を道德におくのに對して、宗教教育に於ては宗教的信念又は宗教陶冶におくのである。但しそれは道德教育を否定し又は排除するのではなく、却つて深奥な裏をつけるためである。これ恰も宗教が道德を否定し又は排除することなく真の宗教は却つて道德を支持し又は含有するのと

同様である。⁶⁸

とし、宗教（仏教）に基づく保育は決して一般道德と矛盾するものではないという。著者は資料3冒頭で

日本伝統教育は祭教一致であつたので、吾等の祖先は最初は神道による宗教教育を、次には仏教による宗教教育を、後には儒教による宗教教育を受けて維新に至り、突然に祭教分離によつて三千年の伝統を失つたのである。⁶⁹

との認識から祭教一致の伝統への復古を長年主張してきたとし、「幼児から児童及び青年に至るまで祭教一致の教育を施したいとは吾人の多年の希望であつた」と語っている。

分析は途上であるが、現段階での研究成果を報告する。

なお、本稿は筑紫女学園大学特別研究助成金をうけた成果であることを付記しておく。

註

- 1 大霞会編『内務省史』財団法人地方財務協会、一九七一年、三三四頁。
- 2 「まったくその動きがなかったのはわずかに青森・岩手・秋田の東北三県と栃木・沖縄県にすぎなかった。」（大霞会編『内務省史』財団法人地方財務協会、一九七一年、三三五頁）。

- 3 米騒動についての『東京朝日新聞』初報は八月五日。この報道により米騒動は全国的に拡大し、九日には名古屋・京都・大阪・兵庫・高松・

- 愛媛でも発生し、その後西日本を中心として軍隊を出動させて鎮圧にあたるほど激しさを増した。騒動の参加者は当局の推計によると全国で七〇万人以上、検挙者八一八五人、うち起訴されたのは七七〇八人で、ほとんどが下層民衆であったという。(小松裕『全集 日本の歴史 第十四巻「いのち」と帝国日本』小学館、二〇〇九年、一六五―一六六頁)。
- 4 昭和五(一九三〇)年の国勢調査では三二万二五二七人となっているが、今日では風見八十二『日本社会政策史』(一九三七年)が示した三〇〇万人という数字に従う見解もある。(菊池正治ら編著『日本社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房、二〇〇三年、一〇一頁)。
- 5 湯沢雅彦『昭和前期の家族問題―一九二六年―四五年、格差・病・戦争と闘った人びと―』ミネルヴァ書房、二〇一一年、六頁。
- 6 欠食児童は昭和七(一九三二)年七月の全国推計で二〇万人を超えていたという。(『厚生省五十年史 記述篇』厚生問題研究会、一九八八年、二六七頁)
- 7 沢山美果子「『保護される子ども』の近代―「捨子」からみた近代社会の展開―」(佐口和郎・中川清編著『福祉社会の歴史 伝統と変容』ミネルヴァ書房、二〇〇五年、二二〇頁)。
- 8 湯沢雅彦『昭和前期の家族問題―一九二六―四五年、格差・病・戦争と闘った人びと―』ミネルヴァ書房、二〇一一年、一六五頁。
- 9 吉田久一『改訂版 日本貧困史』川島書店、一九九三年、三四七頁。
- 10 『戦前期仏教社会事業の研究』不二出版、二〇一三年、五五―五六頁。
- 11 『社会福祉人名資料事典』第二巻(底本…中部社会事業短期大学編『輝く奉仕者 近代社会事業功労者伝』近代社会事業功労者伝刊行会、一九五五年)、日本図書センター、二〇〇三年、二九八頁。
- 12 室田保夫編著『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、八九頁。
- 13 室田保夫編著『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、八五頁。
- 14 大霞会編『内務省史』財団法人地方財務協会、一九七一年、三三八―三三九、三四八―三四九頁。
- 15 大霞会編『内務省史』財団法人地方財務協会、一九七一年、三四〇―三四二頁。
- 16 中西直樹・高石史人・菊池正治『戦前期仏教社会事業の研究』不二出版、二〇一三年、五、四一頁。
- 17 中西直樹・高石史人・菊池正治『戦前期仏教社会事業の研究』不二出版、二〇一三年、二〇―二五頁。
- 18 吉田龍英編『佛教年鑑(昭和九年版)』佛教年鑑社、一九三三年など。
- 19 中西直樹・高石史人・菊池正治編・解題『戦前期仏教社会事業資料集成』第五巻「浄土真宗本願寺派編③」不二出版、二〇一一年所収。
- 20 中西直樹・高石史人・菊池正治『戦前期仏教社会事業の研究』不二出版、二〇一三年、三一頁。
- 21 資料1、二―三頁。
- 22 資料1、一四頁。
- 23 資料1、一六頁。
- 24 資料1、四―五頁。
- 25 資料1、二〇六―二〇七頁。

- 26 資料1、九頁。
- 27 資料1、一五頁。
- 28 宇治和貴・金見倫吾「昭和初期仏教保育事業開始期の状況と子ども観」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第二十五号、二〇一四年。
- 29 資料1、一八頁。
- 30 資料1、一三二―一三三頁。
- 31 資料1、六〇―六二頁。
- 32 資料1、九三頁。
- 33 資料1、九六頁。
- 34 資料1、九七頁。
- 35 資料1、九七頁。
- 36 資料1、九八頁。
- 37 資料1、九八頁。
- 38 資料1、一一三―一二七頁。
- 39 資料1、一〇一―一〇三頁。
- 40 資料1、九六頁。
- 41 資料1、一九一頁。
- 42 資料1、六二―七九頁。
- 43 資料1、七二頁。
- 44 資料1、一三四―一七四頁。
- 45 資料1、一四〇頁。
- 46 資料1、一六五頁。

- 47 資料1、一六一頁。
- 48 資料1、一四九頁。
- 49 資料1、一七三頁。
- 50 昭和五（一九三一）年、大谷派社会課は同書を希望者に無料配布している（『中外日報』第九三一四号、一九一六年九月二四日）。
- 51 『農繁期託児所の経営』の内容を参考として、『真宗』第三二四号、一九二九年一〇月／同第三二五号、一九二九年十一月、の二号にわたって掲載された記事。
- 52 中西直樹・高石史人・菊池正治編・解題『戦前期仏教社会事業資料集成』第八卷「真宗大谷派編②」、不二出版、二〇一二年所収。
- 53 同年、秋期農繁期託児所開設に向けて改訂増補して重版（『中外日報』第九六四四号、一九三二年一〇月十一日）大正十五年七月より社会課主事、のち部への編成替えにともない部長就任。
- 54 『仏教年鑑 昭和五―十一年版』仏教年鑑社、一九三〇年・『仏教年鑑 昭和十二年至十三年版』仏教年鑑社、一九三七年 参照。
- 55 『曹洞宗社会事業要覧』曹洞宗務院社会課、一九二四（昭和十三）年。
- 56 反宗教運動については近藤俊太郎「近代日本におけるマルクス主義と仏教（上）―反宗教運動をめぐって―」『仏教史研究』第五十三号、龍谷大学仏教史研究会、二〇一五年／同（下）同第五十四号、二〇一六年／田中真人「日本戦闘的無神論者同盟の活動」『社会科学』第二十七号、同志社大学人文科学研究所、一九八一年／赤澤史朗「近代日本の思想動員と宗教統制」第四章「反宗教運動」岩波書店、一九八五年を参照。
- 57 田中真人「日本戦闘的無神論者同盟の活動」『社会科学』第二十七号、

同志社大学人文科学研究所、一九八一年、二二七頁。

- 58 資料2、二五二頁。
- 59 資料2、一〇三頁。
- 60 資料2、一四三頁。
- 61 資料2、一三二頁。
- 62 資料2、一三四頁。
- 63 資料2、一一頁。
- 64 資料2、二八九―二九〇頁。
- 65 吉村貫練『青年佛教叢書第二十七編 佛教界の人物』三省堂、一九四〇年、一五一―一二頁。『仏教年鑑』昭和五年版の「内山一三夫（憲尚の本名）」の項に「大正十年大阪釜ヶ崎四恩学園に務む」とあることから「或る貧民窟」は釜ヶ崎のことと思われる（土屋詮教『昭和五年 佛教年鑑』佛教年鑑社、一九二九年）。
- 66 内山憲尚「仏教保育に火をつけた堀信元」『鶴見大学紀要』第十四号、一九七七年、二五頁。
- 67 以上、満州事変については等松春夫「満州事変から国際連盟脱退へ」（筒井清忠編『昭和史講義―最新研究で見る戦争への道』筑摩書房、二〇一五年）参照。
- 68 大串潤児『銃後』の民衆経験―地域における翼賛運動―』岩波書店、二〇一六年、十三―十四頁。
- 69 一九三四年の肺結核死亡者は一三一、五二五人。（吉田久一『日本社会事業の歴史 全訂版』勁草書房、一九九四年、一四四―一四五頁）。
- 70 菊池正治・室田保夫ら編著『日本社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房、二〇〇三年、一一七―一一八頁。
- 71 赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』岩波書店、一九八五年、二〇一頁。
- 72 赤澤前掲書、二〇二頁。
- 73 資料3、一五〇頁。
- 74 資料3、一五〇―一五一頁。
- 75 資料3、一五六頁。
- 76 資料3、二頁。

（かねみ りんこ…人間文化研究所 客員研究員）